

朝野新聞

第百九十八号

夜目も知らぬ梅の香と悲慕の間小取
 達へ跡の野とまよ山とて二人り手にまよ
 鳥がたぐ東雲ちりけ薄明り女へ男乃
 面と見て宛然と驚きつて其許へ村
 の権平さん扱へ昨夜の睦言へと魂消く
 女へ忙然たりその驚きつたも首丈
 惚と此已に恥とせめて其後へ梅と主と
 ちんく鴨中へ能くも親と氣小協ねは終に
 離縁とより又も夫と持多ふ梅に心ひら
 ぞう芝居の小屋で夜合とるひ咄とて
 聞へ先へ廻て身が赤色首尾とらつて薄の
 幕かうう上の女気の廣のやちも狭とのひ
 所へ遠州濱松の程遠くへぬ行阿村其さ
 意地と張さるも己が女房あるづつと取
 ると法ひて娘の悪口覚悟究めて傍の
 身と洗めんと馳行と留ても止らぬ女の念力
 折る末かゝる相撲取勇川何其が漸々
 止し土儀際物言附へ親元へ届け
 其後へ物づくく成しとて



明治十二年 卯 届
 三月十八日
 新元町 山崎徳三郎
 南橋町 丁三番地
 出版人 吉 斎

明治十二年 卯 届